

大木篤夫作「蠟燭をつぐ話」

ところで、日本における死神メルヘンのヴァリエーションという事になると、(坪田)に、大木篤夫作「蠟燭をつぐ話」という短編が収録されており、一九二五年に「赤い鳥」に発表されたものようだが、あらずじは次の通りである。

貧しい小作人のマルチンに子どもが生まれた時、お祝いを申し出た死神の女が、マルチンをあなぐらの奥の人の命の灯がろうそくにともる場所に連れていく。そこで、自分の命のろうそくがまもなく燃え尽きることを知ったマルチンは、別の長いろうそくを折って、自分のろうそくについて帰ってくる。そのマルチンに、死神は、病人の生死の運命を教え、そのおかげで、マルチンは名医となる。死神が病人の足元にいたら病人は助かり、枕もとにいたら助からないというのだ。一度、マルチンは、死ぬべき病人の上下を置き換えて病人を助けたが、全快はさせられず、結局、病人はまもなく死んだ。やがて、マルチンは、年を取って、生きているのが退屈になったが、彼が死ぬより先に、子どもが病気になって、死にそうになる。死神は、マルチンがかつて、あなぐらで、自分のろうそくについだのが、子どものろうそくだった事を教え、マ

ルチンは、死神に頼んで、もう一度、あなぐらに連れていってもらい、自分の長くなつたろうそくを折って、消えそうになっている子どものろうそくに継ぎ足して帰ってくる。マルチンは、子どもが元気になったのを見届けて、息絶える。

これが、あらずじだが、グリムや落語と違って、ナンセンステールとしてのおもしろさは全くない。むしろ、命のろうそくというモチーフを用いて、自然の寿命に逆らうことの愚かさを示す寓話のような物語になっている。死神の位置の設定は、ここでは、あまり重要ではないが、一応、落語や、グリムの第二版と同じである。名づけ親という設定はないが、実質的には、死神は、主人公マルチンの子どもの名づけ親のようなものである。もしかしたら、この作品は、落語「死神」を土台にしたものかもしれないが、もちろん、グリムから直接作られた可能性も否定できない。間接か直接かはわからないが、いずれにしても、これも、グリムの「死神の名づけ親」と同じメルヘンから作られている事は明らかであり、広い意味では、このメルヘンのひとつのヴァリエーションと言うことも可能であろう。ただ、死神の性別という点では、大木作品は、ドイツ系ではなく、イタリア系である。では、たとえば、大木作品こそ、イタリアのオペラ「クリスプーノ」から